

# 外国語植物名同定の諸問題 —異文化理解のワンステップ— (2)

山原芳樹  
(2001年10月15日 受理)

## Probleme bei der Übersetzung von Pflanzennamen in Fremdsprachen — Eine Stufe zur interkulturellen Studien — (2)

Yoshiki YAMAHARA

### I. 序 文

本稿では、身近な植物を何と呼んだらよいのか、これを外国語では何と言うのか、という素朴な疑問から出発して始めた作業の過程で気づいた問題点の一部について述べる。すなわち、原典がドイツ語の文芸作品に登場する植物を日本語に翻訳する場合に生じる幾つかの問題についてである。

辞書や事典、図鑑を頼りにこの作業に取り組むとき、利用者がどのような困難に直面するかについては本紀要の第50巻別冊で取り扱ったが、その後気づいた問題について、本冊子中に同一標題の(1-2)として纏めてみた。これは、2000年3月にフンボルト大学(ベルリン)において開催された東西文化コロキウムで発表した報告をもとに原稿にしたものである。

世界には、5,000種とも7,000種とも言われる言語が存在するとのことである。それぞれの言語圏には固有の歴史と文化があり、社会構造や生活風習はそこで生活している人々の世界観や価値観と分かち難く結びついている。また、一つの世界はその地の自然的・物理的環境にも強く影響を受けている。従って、ある文化圏で用いられている概念が意味する事柄を他の文化圏にそのまま移し替えることには、さまざまな困難が伴う。例えば、本稿で扱う植物名もその例に漏れない。現実世界に存在し、具体的な実態を有しているある対象物の名前を確認し、他の言語ではどう表現しているか、あるいはどう言い表したらよいか、そもそも移しかえることが可能なのか、出来なければその代替手段は何か、と問題は広がってゆく。また、日常世界のみならず、文芸や儀式的分野にも植物が登場してくることが多いが、この場合には事情は一層複雑になる。例えば、翻訳に携わる者にとっては、具象世界を超えたレベルにおいて、ある事物がもつ象徴的意味についても考察すること

が必要になってくる。本稿は、国際化と情報化が進む中であって、植物を手がかりに異文化理解の問題について考えるための、ささやかな試みの一つである。

## II. 同定作業の一過程

以下に示すのはG. トラークル (1887-1914) の「Sommer 夏」\*1) と題した詩の原文と、その和訳の例である。本編では、ここに登場する「Kastanie」とその訳語「栗」との関係について考察し、翻訳作業の過程で生じてくる植物名の取り扱いの難しさを論述する。意図するところは、翻訳の正しさを云々することではなく、ある言語で表された植物名を他の言語に移し変える際に生じてくる問題点を明らかにし、翻訳の難しさとこれを乗り越える視点を獲得するところにある。

### 1. G.Trakl 作「Sommer 夏」

Am Abend schweigt die Klage / Des Kuckucks im Wald. /  
Tiefer neigt sich das Korn, / Der rote Mohn.

Schwarzes Gewitter droht / Über dem Hügel. /  
Das alte Lied der Grille / Erstirbt im Feld.

Nimmer regt sich das Laub / Der Kastanie. / Auf der Wendeltreppe / Rauscht dein Kleid.  
Stille leuchtet die Kerze / Im dunklen Zimmer; / Eine silberne Hand / Löschte sie aus;  
Windstille, sternlose Nacht.

(Georg Trakl, 1887.2.3. Salzburg - 1914.11.3/4 Krakau)

#### 夏\*2)

夕べ森に郭公の 嘆きは黙す。更に深く徳を垂れる麦、 赤い罌粟。  
黒い雷雨は迫る 丘の上。こおろぎの古い歌が 野に絶える。

そよとも動かぬ 栗の葉。廻り階段の上では お前の衣装がさやいでいる。  
静かに蠟燭が 暗い部屋で灯っている； 銀いろの手が それを消した；  
風のない星の見えぬ夜。(栗崎 了・滝田夏樹 訳 -1967)

#### 夏\*3)

夕暮れになると、森では郭公の嘆きが沈黙する。深ぶかと頭をたれる小麦、赤い罌粟の花。  
黒い嵐が 丘のうえにわだかまっている。蟋蟀の古びた歌が 野原で死にたえる。

身じろごうともしない 栗の木の葉。廻り階段のうえで おまへの衣ずれの音がする。  
ほの暗い部屋には 静かに蠟燭がともっている。銀色の手が それを吹き消した。

嵐も耐えた、星のない夜。(吉村博次 訳-1977)

手元の独和辞典はこの植物について、「1.a) (Edelkastanie) クリ (栗) 属 b) (Esskastanie) クリの実 2.a) (Rosskastanie) マロニエ, セイヨウトチノキ (西洋橡) b) マロニエ (セイヨウトチ) の実 3. (動物) (馬などの足の内側の) 角質のたこ」と記載されている。この詩が「カスターニエの葉」と詠っている以上、Hornwarze と呼ばれる動物学上の説明はここでは当てはまらない。

Edelkastanie, Esskastanie に該当する植物の学名は, [Castanea sativa Miller] あるいは [C.vulgaris Lam.] であり, ブナ科クリ属に分類されていて, 和名は (イタリア) クリ, ヨロッパグリ, 英語名は European sweet chestnut, Spanish chestnut である。温暖な乾燥気候を好む落葉の高木で, 南ヨーロッパから小アジア原産, 主としてイタリア, フランス, スペインなど地中海地方で栽培されていて, それぞれの産地の国名をつけて呼ばれる<sup>\*4)</sup>。マロングラッセは, この木の果実を砂糖漬けした菓子である。

日本でクリあるいはニホングリと呼ばれる植物の学名は [Castanea crenata Sieb. et Zucc.], 別名 [C.japonica Thunb.], 英名 Japanese chestnut であり, 日本, 朝鮮半島南部に分布している。山野に自生するシバグリが原種である。近縁の種には, アメリカグリ (学名 [C.dentata (Marsh.) Borkh.] 別名 [C.americana Raf.], 英名 American chestnut) やチュウゴクグリ ([C.mollissima Blume] 別名 [C.bungeana Bl.] 英名 Chinese chestnut) がある。チュウゴクグリは, 天津栗あるいは甘栗の名称で日本で市販されている。

他方, Rosskastanie はトチノキ科トチノキ属の植物であり, 学名は, [Aesculus hippocastanum L.] で, セイヨウトチノキ, ウマグリ, マロニエ, ヨウシュトチノキの和名を持つ。英語では common horse chestnut, horse chestnut, European horse chestnut と呼ばれ, やや赤みを帯びる白色の花を 5~6 月に咲かせる落葉高木である。ギリシャからトルコにかけて分布し, 街路樹として欧米各国で広く植えられている。花は重要な蜜源であり, 樹皮や果実, 葉は薬用に利用されている。日本のトチノキ (学名 [A.turbinata Blume], 橡・栃, ウマグリ Japanese buckeye, Jap. horse chestnut, Oblikonker tree) と良く似ているが, 掌状をなす 5~7 枚の小葉が日本のものより小さいこと, 熟すと褐色になる種子をくるむ大型蓇葖果には, トチがイボ状突起をもつのに対し, セイヨウトチには棘状の突起があることが分かりやすい相違点である。<sup>\*5)</sup>

この種の実産地は北部ギリシャ、ブルガリア、トルコ、コーカサスに跨る地域とされているが、1615年にフランスにもたらされ、程なくして鑑賞木として西洋で広く利用されるようになった。<sup>\*6)</sup>日本には明治中期にもたらされ、現在では公園や植物園で大木を見ることができる。街路樹としても利用されているが、近年セイヨウトチノキとアメリカトチノキ [*A.pavia* L.] との雑種であるベニバナトチノキ [*Aesculus carnea* Hayne] が見られるようになった。鹿児島市内でも、樹高5メートルほどに育った「マロニエ通り」が人気を呼んでいる。

辞書と植物事典を用いた作業では、ここまでのことしか分からない。つまり、クリと訳すか、トチあるいはマロニエ、ウマグリを取るか、の翻訳上の決定はまだなし得ない。しかし、これを考察するとき一つの手がかりとなるのは、作者がどこでその一生を過ごしたかを考慮することである。

作者のトラークルは、ザルツブルクの裕福な家庭に生まれ、保母や家庭教師とともに大きな邸宅で幼少時代を過ごした。大学で薬学を学んだ後ウィーン、インスブルックで薬剤師を目指したが徒勞に終わった。第一次大戦が勃発すると東部戦線に召集された。しかし、戦いの凄惨さに衝撃を受け、自殺を図ったが未遂に終わり、クラカウの衛成病院に送られた。1914年にコカインの飲み過ぎで27年の人生を終えた。<sup>\*7)</sup>

彼が短い一生を過ごしたのは、現在のオーストリアとその東部であることを考えると、上記2種の植物のうちどれが該当するののかとの問いかけは、地中海沿岸のラテン系諸国に分布するとされるヨーロッパに接した機会はどのくらいあったのか、あるいはフランスでマロニエと呼ばれる植物に触れた可能性はどれほどだったかとの間に行き着く。もっともこの設問が成立するのは、ある文芸作品の中に使われる言葉や語彙が、作者が体験した日常生活や内面と深く関わっている、あるいは関係せざるを得ない、と仮定してのことである。また、作者はある具体的な対象物を想定しながら創作活動を行った、との前提が必要であることを断っておきたい。

まず、ドイツ語圏における一般的な使用法と、植物学的な分布の両面からこの間に迫ってみる。

## 2. カスターニエンが登場する文芸作品

カスターニエンが文芸作品の中で登場するときは、'Edel-', 'EB-' あるいは 'Roß-' の修飾語を持たないまま使われることが多い。以下にその幾つかの例を挙げる。

### 1) *Kriegslied des Mais*

(Karl Joachim ["Achim"] Friedrich Ludwig von Arnim, 1781-1831)

Wenn des Frühlings Wachen ziehen, / Lerche frisch die Trommel rührt, Ach da möchte ich mit ziehen, / Ach da werd ich leicht verführt, Handgeld Druck und Kuß zu neh-

men / Und ich kann mich gar nicht schämen.

Wie die Waffen helle blinken, / Helle Knospen brechen auf,  
Und die Federbüsche winken / Von Kastanien obenauf;  
Blühen, duften, wehen, fallen, / Und ich muß so lockend schallen.

Wie gefährlich sind die Zeiten / Wenn die Bäume schlagen aus,  
Und ich warne euch bei Zeiten / Eh Sallat auch schießet aus;  
Kinder ihr müßt ihn bestehen / Die im Grünen sich ergehen.

Wird so viel Quartier bestellt, / Ach so wird es mir zu eng,  
Wie der Dienst mir wohlgefället, / Schon zum Spaß ich mit euch schwenk';  
Schwenk' wie Blätter in dem Winde, / Immer anders, kühl und linde.

Schwinge nur die bunten Fahnen / Apfelblüt in Morgenlust,  
Ja ich schwör dir und wir bahnen / Gleichen Weg in freier Brust;  
Was im Frühling treu verbunden / Wächst zusamm' für alle Stunden.

#### 五月の戦いの歌

春の目覚めが近くなり、ヒバリが心新たに太鼓を叩くとき、  
わたしも一緒に歩みたい、すぐにも誘惑されたいのさ。  
どうにか契約金を手にしたい、恥じることなど、ありはしない。

武器が明るく輝くように、明るい蕾が口を開ける  
カスターニエンの樹上から、鳥の羽冠が合図を寄こす。  
花咲き、香りたち、風になびいて、落下する。わたしも、負けずに上手く唄いたい。  
...

振るのは五色の旗だけにしておきな、朝の喜び満ちたリンゴ花、  
誓っても良いが、私たちは心を開いて同じ道を進むのだ。  
春に誠で結ばれたしは、いついつまでも共に育つのさ。

## 2) Wohin mit der Freud'? (9 Reinick-Lieder, 1882)

Ach du klarblauer Himmel, / Und wie schön bist du heut'!  
Möcht' ans Herz gleich dich drücken / Voll Jubel und Freud'.

Aber 's geht doch nicht an, / Denn du bist mir zu weit,  
Und mit all' meiner Freud' / Was fang' ich doch an?

Ach du lichtgrüne Welt, / Und wie strahlst du voll Lust!  
Und ich möcht' gleich mich werfen / Dir voll Lieb' an die Brust;  
Aber 's geht doch nicht an, / Und das ist ja mein Leid,  
Und mit all' meiner Freud', / Was fang' ich doch an?

Und da sah ich mein Lieb / Am Kastanienbaum stehn,  
War so klar wie der Himmel, / Wie die Erde so schön,  
Und wir küßten uns beid', / Und wir sangen voll Lust,  
Und da hab' ich gewußt, / Wohin mit der Freud'!  
(Robert Reinick 1805-1852)

### 喜びはどこへ？

ああ、真っ青な空よ、君は今日はなんて綺麗なんだ！  
嬉しくて、直ぐにも君を胸に抱きしめたい。  
でも、そうはいかないよ、君は遠すぎるんだもの。では、この溢れる喜びはどうしよう？

ああ、緑に輝く世界よ、君の光は何て喜びに満ちていることか！  
愛一杯に君の胸に飛び込みたい。  
でも、そうはいかないよ、これは僕の苦しみなんだもの。では、この溢れる喜びはどうしよう？

そのとき、僕は見た、愛する人がカスターニエンの木の下に立っているのを、  
空のように明るくて、大地のように美しく、  
僕たちは二人はキスを交わして、嬉しくて歌を唄った。  
そのとき、僕にはわかったのさ、喜びがどこへ向かったのか！

### 3) Vorsicht

Die Kastanien blühn, /  
Ich nehme es Kenntnis, /  
äußere mich aber nicht dazu.  
(Günter Eich, 1907 2.1 Lebus [Oder]-20.12.1972 Salzburg)

**用心**

カスターニエンが咲いた。  
僕には分かっているけれど、  
でも、口に出すことはしないのだ。

**4) Beschreibung eines Dorfes**

...Dabei werde ich auf das alte Gasthaus zu sprechen kommen, auf seine nach Norden gerichtete Terasse mit dem kalten Eisengeländer und den Eisenstühlen, unter Kastanien...

(Marie Luise Kaschnitz, 1901.1.31 Karlsruhe-1974.10.10 Rom)

**ある村の描写**

(1950年夏の大嵐について私は言いたいのです、ブドウや畠の果物が氷雨と霰のあとでは消えてしまい、それからグシャグシャになって再び姿を現したことを、旅籠の隣のクルミの木が雷によって裂かれ、道路に叩きつけられた有り様を。) その時は、この古い旅籠のことを語ることになるでしょう、北側に向かって作られたテラスと、カスターニエンの下の冷たい鉄の手摺と鉄の椅子のことを ...

**5) Üer abgefallenen Laub**

Feuchte greift, im Ungewissen / Gärt der Teig gefallnen Laubes.

Pytisch wie aus Erdenrissen / Dunstet Moder des Verblühten.

Ahornblatt kann noch behalten / Umriß, Ader, seiner Spreite.

Blanke Haut wirft keine Falten / Der Kastanie, der Eichel.

(Wilhelm Lehman, 1882.5.4 Puerto Cabello [Venezuela] - 1968.11.17 Eckernförde)

**落ち葉の上で**

湿気が食い込み、落ち葉の生地が発酵する。咲き終わったものの腐敗が 土の割れ目から湯気を出す。モミジの葉っぱはまだ、葉身の輪郭や葉脈を保っている。カスターニエンやドングリの輝く皮は、皺ひとつない。

**6) Letzte Baumschatten**

Diese träumenden Schatten / Aquariengrün vor dem Roste /

Licht sickert ein wie Wasser in Moos /

So sthen sie ruhevoll / Die alten Kastanien.

Sie dulden die Luft voller Sterben / Sie tragen die Feuchte des Abends /  
Die Stille lastet / Mit fernhin hallenden Stimmen.

Kastanien, Karyatiden des Unsichtbaren / Morgen schon ohne Laub /  
Leere, greifende Arme / Üermorgen- /

Dann ist Winter / Und den Schnee zu tragen ist schwer.

(Oda Schaefer, 1900.12.21.12. Berlin -)

### 最後の木陰

この夢見る蔭 水槽の緑青色 コケにしみ入る水のように光が通る、  
こうして彼らは静かに立っている 年経たカスターニエンの群が。

彼らは死の気配を耐えている 夕方の湿気を担っている  
声は彼方へと消えてゆき 静寂が重くのしかかる。

カスターニエンの樹は、見えないものを支えるカリアティード女神。  
明日にはもう葉を失い 明後日には伸ばした裸の腕を-すると冬だ、  
雪は支えるのには重すぎる。

### 3. 日常生活とカスターニエン

セイヨウトチノキが咲く時期は5月から6月であり、中央ヨーロッパでは正に麗しの季節である。公園や街路脇で樹高20メートルにもなるこの木がクリーム色の円錐花序をつけはじめると芳香を放ち、ミツバチが群がる。遠くからみると、緑の葉の中に立ち上がった白色の斑点が浮き立って、あたかも大空を背景にした大型のクリスマス・ツリーのような、図案化された文様を眺める観がある。足下には草花が咲き乱れ、春爛漫の雰囲気を醸し出す。成長が早く、花を沢山つけることから、贅沢と富の象徴になっている。西欧に伝来した17世紀初頭以降、樹皮には高熱を下げる薬効成分や黄色の染料成分が含まれることが判明し、価値が一層高まった。現在でも、自然療法あるいは民間医薬の分野では、製品として市販されている。また、種子には多量のデンプンとともにタンニンやサポニンが含まれるので食用にはならないが、地域によっては粉末にしてアーモンド生地に似たパスタを作る。<sup>\*)</sup>日本のトチモチ、トチセンベイ、トチダンゴを作る利用法と似ている。果実は、家畜、とりわけブタの飼料としても重要な役割をになっており、またドングリと同じく子どもの遊びに利用される。10月になると、黄金色の落葉が樹下を絨毯のように敷き詰め、この樹の魅力をもっと高めるものとなっている。



こうした背景をもとにして冒頭に引用した作品を読み直すと、この樹が西欧社会の中で果たしている役割とイメージが具体的な姿を見せてくる。春先にニス状の乳液に守られて芽吹いた赤みを帯びた蕾は、すぐにと数枚の小葉からなる手の平形に変わってゆく。この掌葉は、恐らく西欧の広葉樹の中では一番大きなものである。葉の間から空に向かって花序の蕾を徐々に伸ばし、やがて開く花は基部が幾分赤みを帯びた白色で、その色や形だけでなく、香りでも人々を楽しませる。また、記述のように蜜源として、あるいは薬効面や商工業製品面での有用樹でもある。夏には、緑陰樹としても重宝され、秋にはその下で子供の歓声が響き、冬を間近にした家畜が懸命に餌を漁る。ドイツのソーセジやハムは、ドングリとロス・カスターニエンの実で作られるとさえ言われているほどである。

上述の6編の詩や描写から伺われるのは、「カスターニエン」と通例略して呼ばれる植物は、「セイヨウトチノキ」がもつ植物学的特性とイメージに重なってくる部分が多い。またドイツ語圏の人々に尋ねても、日常生活で思い浮かぶのはまずこの種である、との答えが返ってくる。スイスのドイツ語圏では、イアタリグリのことをマローネ、マローニエと呼んで、カスターニエンと区別しているという。

#### 4. 植物事典に記載されている両者の分布状況

1) 「ヨーロッパグリ」は、非常に広範囲にわたって栽培されているため、本来の原産地がどこであったかを言うのは難しいとされている。<sup>\*9)</sup> 手元の「ベルテルスマン図入り大植物事典」の記述を参考に整理すると、前述のように地中海の沿岸地域の北側の地域、すなわちイベリア半島、南仏、イタリアに多いが、更にバルカン半島、ハンガリーを超えて黒海にまで至る地域に広がっている。アルプス北側の生育地はあちこちに点在し、イギリスからオスロ地域までを含む。ただし、この北方地区では実は小さく、実をつけることはないとのことである。<sup>\*10)</sup> 南西ドイツには小さなクリ林が存在しているが、これは栽培種である。

かつて専門家たちは、食用グリは中央ヨーロッパを原産地とする植生には入っておらず、またイタリアを故郷とするものではなく、ローマ人によって東洋からもたらせられたとの見解を表明していた。言語学者もこの説を支持していて、古代の文筆家も殆どカスターニエンについて語っておらず、また触れていてもギリシャクルミ等の誤解を招く言葉で呼んでいた、としていた。

文献に出てくる最初のもは、ニカンドロス（紀元前2世紀）がテッサリアの都市「カスターネイア」に因んでクリに名前が与えられた、と述べたものとされている。しかし、この事情を紹介している文献（1977年刊）の著者は、事実は反対であって、カスターネアという植物名がこの町に名前を与えたのだとしている。ローマの作家の中では、ヴェルギリウスが初めて 'castaneae molles' と呼んでおり、後にピレニウスが8種の変種を区別している。

- 2) ところが、上記の曖昧な推測に比べ、地質学者たちは、第三紀の終わりにはヨーロッパの現在種に似たクリ、あるいはその先駆種が存在していたという、より確かな証拠を提出している。氷河期の堆積層として有名なピアニコ・セレーレおよびデス・ヴァレソットでは葉の化石が見つかり、プレアルプス地方（アルプス山脈の東北部山地）の泥炭地からはクリの花粉が発見された。そしてその頻度は、青銅器時代に相当する上部の層では増えている。さらに、この泥炭地ではクリの木材を利用した堤防や杭上家屋の遺跡も見つかっている。すなわち、ヨーロッパグリの野生種はイタリアを原産地とするものであり、アルプスの北側は北部オーストリアを除けば、考えられない、というのがこの大事典の結論である。<sup>\*11)</sup>
- 3) ドイツ及び北部ヨーロッパの野生植物を扱っている「パーレイ・花図鑑」(1986年刊)では、echte Kastanie [*Castanea sativa*] は、原産地を南部ヨーロッパ、北アフリカとし、該当のヨーロッパ地域全体に分布するが、ドイツ国内では希少種あるいは散在種としている。また、スイスの植物を取り上げている「フローラ・ヘルヴェティカ」(1996年刊)によると、Edel-Kastanieの原産地は南西アジアであり、スイスでは海拔1,500m程度までの山地にある森林に分布していて、その生育地における出現頻度は20%強とのことである。とりわけチロル州に多く、他の地域では栽培種か野生種であるとされている。

## 5. 「クリ」か「マロニエ」か、あるいは「トチ」か？

第Ⅱ章第1節で設定した二つの疑問は、相異なる結論に到達したことになる。少なくとも、一つの答えを引き出すために、十分な論拠を引き出すまでには到らなかった。すなわち、ドイツ語圏の用法に従えば、Kastanien は「セイヨウトチノキ」を指す場合が一般的である。他方、植物分布から見ると、ヨーロッパグリの原産地はイタリアからスイス、北部オーストリアを経て南西アジアに至っており、また現在も野生種あるいは栽培種として分布している。従って、「食用グリ」の木に詩人トラークルが遭遇した可能性は極めて高いと言える。家庭教師の夫人がフランス人だったことを考えると、その蓋然性は一層高まる。

## Ⅲ. カスターニエンの詩的イメージ

次に検討すべきは、文芸作品の翻訳としてどちらが適切かという、別次元の問題となることになる。ここでも、設問は二つに分けられる。すなわち、当該の作品中に使われている詩的イメージ、メタファーをどう読みとるかという課題と、日本語に移し変えた時の詩的効果が原作のそれとどの程度まで重なってくるかという問題である。

### 1. トラークル作品におけるカスターニエン

G. トラークルは、他の詩でも何箇所かで Kastanien を登場させている。下の引用詩句のうち

下線部が該当箇所であり、これに対応する試訳を加えてみた。また、その前後の状況についてのキーワードをいくつか括弧内に挙げてみた。

## (1)

Ein Mönch, sein schwangres Weib dort im Gedränge.

Gitarren klimpern, rote Kittel schimmern.

Kastanien schwül in goldnem Glanz verkrümmern.

Schwarz ragt der Kirchen trauriges Gepränge.

(Traum des Bösen)

...

カスターニエンは金色の輝きの中で重苦しく成長を止め、...

(夕暮れ時、窓から見えるマルクト、人々、教会、街路樹、星)

## (2)

Braune Kastanien. Leise gleiten die alten Leute

In stillern Abend; weich verwelken schöne Blätter.

Am Friedhof scherzt die Amsel mit dem toten Vetter.

Angelesen gibt der blonde Lehrer das Geleite.

(Winkel am Wald)

...

褐色のカスターニエン。ひっそりと老人たちが、更に静かな夕べの中に滑って行く。柔らかく枯れる美しい葉。...

(夕べ、墓地、死んだ従兄、教会の窓、庭)

## (3)

Ans Blumenfenster wieder kehrt des Kirchturms Schatten

Und Goldenes. Die heiße Stirn verglüht in Ruh und Schweigen.

Ein Brunnen fällt im Dunkel von Kastanienzweigen-

Da fühlst du : es ist gut ! in schmerzlichen Ermatten.

(Abendmuse)

...

噴水泉の水が暗いカスターニエンの枝蔭で落下する -

(教会の塔、沈み行く太陽、沈黙、秋のマルクト広場、どこかの庭で奏でる音楽)

...

## (4)

Die fremde Schwester erscheint wieder in jemand's bösen Träumen.  
 Ruhend in Haselgebüsch spielt sie mit seinen Sternen.  
 Der Student, vielleicht ein Doppelgänger, schaut ihr klänge vom Fenster nach.  
 Im Dunkel brauner Kastanien verblaßt die Gestalt des jungen Novizen.  
 Der Garten ist im Abend. Im Kreuzgang fkattern die Fledermäuse umher.  
 Die Kinder des Hausmeisters höhen zu spielen auf und suchen das Gold des Himmels.  
 Endakkorde eines Quartettes. Die kleine Blinde läuft zitternd durch die Alee,  
 Und später tastet ihr Schatten an kalten Mauern hin,  
 umgeben von Märchen und heiligen Legenden.  
 (Psalm, Karl Kraus zugeeignet - 2. Str.)

...

褐色のカスターニエンが作る黄昏時の暗がりで, ..  
 (夕暮れ時, 庭, ハシバミの茂みに隠れる異様な姿の妹, 窓から眺める分身)

## (5)

Es dämmert. Zum Brunnen gehen die alten Fraun.  
 Im Dunkel der Kastanien lacht ein Rot.  
 Aus einem Laden rinnt ein Duft von Brot.  
 Und Sonnenblumen sinken über'n Zaun.

...

褐色のカスターニエンが作る黄昏時の暗がりで, ..  
 (夕暮れ, 噴水, 老婆たち, 広場, パンの香り, ヒマワリ。酒場。音楽, 少女..)

Ins brauen Gärtchen tönt ein Glockenspiel.  
 Im Dunkel der Kastanien schwebt ein Blau.  
 Der süße Mantel einer fremden Frau.  
 Resedenduft; und glühenes Gefühl.  
 (Der Herbst des Einsamen, Die Verfluchten)

...

褐色のカスターニエンが作る黄昏時の暗がりで, ..  
 (暮れ時, グロッケンシュピール, 女性の可愛らしい青マント, レゼーダ草の芳香)

## 2. カスターニエンのトラークルのイマージュ

上記の試訳とキーワードを、作品の成立年や制作過程等を見捨て、恣意的に並べてみると一つの状況を浮かびあがらせることができる。季節は秋、夕暮れ時、沈む太陽の金色の光を浴びて立つ教会、その前の広場は徐々に暗くなり、静かに行き交う人々のシルエットが浮かび上がる。教会墓地には埋葬されたばかりの知人が眠り、近所の庭に生えるハシバミの茂みには隠れるように妹が潜んでいて、その前で子ども達が無邪気に遊んでいる。そこかしこから音楽が聞こえ、パンの匂いやモクセイソウの香りが漂ってくる。広場を中心に四方に延びる道路は、落葉する直前のカスターニエンの並木道。その下は、建物とまだ豊かな葉のせいで、一層暗がりとなっている。

こう読みとってみると、カスターニエンとは、町の中心部をや道路を飾る街路樹であり、落葉する前は豊かな蔭を作り出す植物で、市民にとってはその下を散策し、知人と談笑し、待ち合わせをする、そういう場所を提供する街路樹でもあった、と言えるように思う。これはすなわち、セイヨウトチノキ、マロニエである。

## 3. 和名訳語の適切さ

植物分類学上の名前は判明したとしても、文学作品としてどの訳語を用いるたらよいかは、翻訳者や研究者を悩ませる問題である。日本に古来から存在する植物には、ウメ、タケ、マツ、スギ、モモ、ナシ、セリ、クワ等の2拍名、サクラ、アンズ、ヒノキ、ツバキ、スイカ等の3拍名が多い。しかし、アジサイ、ハクサイ、マタタビ、オモダカ等の4拍、オキナグサ、イワウチワ、フダンソウ、トウガラシ等の5拍、タネツケバナ、モウセンゴケ、アリノヒフキ、シモツケソウ等の6拍、と並べてみるとまだ仲間が増えそうだし、ここに長さとか色、生育地、葉や花の形まで加えていくと7拍以上の名前も多くあることになる。しかし長い名前は、2、3拍で区切ったり、5や7の拍で纏めたりと和歌や俳句のリズムと強く関係している。さらに、別名で言い換えたり、漢字にルビを振って好みの長さに調整するするなど、語句選択の可能性が多様である。また、和名にはそれなりのイメージが定着しているものも多い。季語はその最たるものであろう。

カスターニエンを「クリ」と訳す時の適否について考えてみたために、これがヨーロッパグリを指すものと仮定してみる。先に引用した植物図鑑では、*echte Kastanie* [*C. sativa* L.] について、その雌雄異花の花序は、「duftend」 芳香を放つ、あるいは「新鮮なパンのような心地よい匂いを発散する」と説明している。これが日本人にも心地よいかどうかは、分からない。日本で刊行された樹木大図鑑でも、「芳香を放つ虫媒花」と解説しているものがある。<sup>\*12)</sup> 他方、ここでのニホングリ・シバグリ [*C. crenata*] についての説明は、「匂いが強く、虫媒」とあり、しばしばスペルマの匂いを連想させると言われるニホングリについての控えめな表現となっている。匂いについては比較的寛容である、あるいは西欧人に比べて鈍感であると言われる日本人の臭覚能力にとって、「ク

りの花」の放つ香りが、不快なものかどうかは、詳しく調べてみる必要があるだろう。しかし、少なくともヨーロッパで芳香を放って人に快感を呼び起こすと同じように、この植物が日本でも心地よく受け取られるとしたら、少なくとも「クリ」という単語は避けた方が無難であろう。「クリの開花期には良い香りが漂う」との記載を持つ文献は、寡聞にしてまだ知らないからである。

### 註

1. 本稿で取り扱ったトラークル作品の殆どは、「対訳トラークル詩集」から拾ったものである。意図するところは本論でも触れたように、翻訳する際に必然的に直面することになる幾つかの問題点を整理し、理解をより深めるための足がかりを得ることである。30年以上前にこの作品に取り組んだ編者の方々の熱意と様々な工夫に教えられることが多かった。無断で引用する失礼をお詫び申し上げるとともに、勉強させて頂いたことにあつく感謝申し上げたい。
2. 「対訳トラークル詩集」 229頁 3. 吉村博次 訳 4. 堀田 227頁 5. 同 52頁 6. Bertelsmann 918頁 7. 「対訳 トラークル詩集」 295頁以降 8. Bertelsmann 918頁 9. 同 592頁 10. 同左 11. 同左 12. 林 59頁

### 参考文献

- \* 対訳 トラークル詩集, N.ホルムート・栗崎 了・滝田夏樹 編, 同学社 1967
- \* 塚本洋太郎総監修, 園芸植物大事典 1~6 小学館 1986
- \* 堀田満代表編集, 世界有用植物事典 平凡社 1989
- \* 石井林寧・井上頼教, 最新園芸大辞典 誠文堂新光社 第8版 昭和53年
- \* 林弥栄監修, 原色樹木大図鑑 北隆館 第2版 昭和62年
- \* 小学館 独話大辞典(第2版)コンパクト版. 国松孝二 編, 小学館 2001
- \* 豊国秀夫編, 植物学 ラテン語辞典 至文堂 昭和62年
- \* 中平 解, フランス文学にあらわれた動植物の研究 白水社 1981
- \* 加藤憲市, 英米文学植物民俗誌, 富山房, 東京 昭和51
- \* 加藤さだ, 英文学植物考, 名大出版会, 1985
- \* 山原 芳樹, 日独植物名対照表, 鹿児島独仏文学論集 VERBA No.10 1987
- \* 山原 芳樹, 外国語植物名同定の諸問題 —異文化理解のワンステップ  
鹿児島大学教育学部研究紀要 第50巻 別冊 1999
- \* Moderne deutsche Naturlyrik. Hrsg. v. Edgar Marsch, P. Reclam jung. Stuttgart 1980
- \* Beschreibung eines Dorfes. M. L. Kaschnitz, Insel taschenbuch 665, Insel Verlag Ffm. 1988
- \* Sturms Flora von Deutschland. K. G. Lutz, Verlag K. G. Lutz, Stuttgart 1906
- \* Taschenatlas zur Flora von Nord-u. Mittel-Deutschland. H. Potonié, Gustav Fischer 1923
- \* Das Grosse Illustrierte Pflanzenbuch. W. Naummeister, Berstersmann Verlag, Gütersloh 1967
- \* Parays Blumenbuch. R. Fitter u. a., Paul Parey Verlag, 2. Al. Hamburg & Berlin 1986
- \* Brockhaus Enzyklopaedie. 24 Bde. Wiesbaden 1967
- \* Flora Helvetica. K. Lauber/ G. Wagner, Verlag Paul Haupt, Bern 1998
- \* Gesund leben mit Maria Treben - Streß im Alltag. Verbeugen-erkennen-heilen. W. Heyn VI., München 1989
- \* Wörterbuch der Deutschen Pflanzennamen. Heinrich Marzell, S. Hirzel Verlag, Stuttgart 1979

## 補

筆者は、本紀要50巻別冊人文科学編に投稿した本稿と同標題の論述において、「同定作業の一例 —キャベツを求めて—」と題した第IV章で、久万美術館所蔵の版画作品「キャベツ」が、正しいキャプションかどうかの考察を行った。その時点では、キャベツの一種であり、ドイツで栽培される Spitzkohl に近いものであり、和名はまだ分からない、との結論を出した。その後、「尖りキャベツ」との意味をもつシュピッツ・コールの種子をドイツより入手し、農業に詳しい元鹿児島大学教授 窪田昌先生に依頼して栽培して貰った。その結果、版画作品に表現された植物とほぼ同じ形のキャベツであることが分かった。また、フランスより Coeur de Boeuf の名前で販売されている植物の種子を入手し、現在栽培中である。平行して、久万美術館の元館長松岡義太氏のもとに両種の種をお送りし、そちらでも栽培中とのことである。今までのところ推測できるのは、濱口洋三作品のキャプション名は正しくつけられたものであり、「尖りキャベツ」は恐らく「牛の心臓キャベツ」と同じものか、極めて近い関係にある栽培種であるということである。

## (付)

最近入手した Merzel の「ドイツ語植物名辞典」には、以下の学名が載っている。上記推測を裏づける資料である。

Spitzkofl = *Brassica oleracea* var. *capitata* subvar. *conica* Lam.

Ochsenherz = *Brassica oleracea* var. *capitata* subvar. *obovata* DC.

= Coeur de Boeuf